チベット・アムド地域における仏教、ボン教、道教などの混交的宗教実践

中国青海省海南チベット族自治州貴南県砂溝郷ボンコル村の事例を中心に

拉加本（ラァジャブン）　（総合研究大学院大学）

チベット・アムド地域(アムドはチベット語アムド方言を話す地域をさしており、青海省の大部分と甘粛省甘南チベット族自治州と四川省アバ・チベット族自治州を網羅している)は、宗教的に中央チベット地域と深く関わってきたが、文化的、経済的には古くから漢民族やモンゴル族など周辺諸民族の影響を強く受けてきた。当該地域には、回族やモンゴル族、土族、サーラル族など多民族が混住し、それらの民族はチベット仏教、ボン教、道教などの宗教実践を混交させてきた事例が見られる。そこではチベット化された地域（青海省黄南チベット族自治州河南モンゴル族自治県）[シンジルト 2003]、イスラム化された地域（青海省海東地区化龍県群科鎮)、漢化された地域（青海省タル寺の周辺のクブンム六つの部落など）など様々な社会現象が見られ、地域固有の独特な文化を形成している。

歴史的に吐蕃王国の崩壊後、チベット・アムド各地域は中国の元、明、清などの皇帝の師匠及び帝師や土司、化身ラマなどの支配地および寺領となり、宗教面では中央チベットと係わりが強く、ほとんどの学僧は中央チベットのラサに留学した。政治面では中国の各王朝の政策下に置かれてきた。但し、10 世紀末に登場した吐蕃の末裔であるジョスロのツォンカ政権（tson ka rgyal rgyud）を除けば、チベット・アムド地域の政治、経済、宗教において直接統治された歴史はほとんどなかった［チョルテンジャブ 2018]。そうしたなかで中国の各王朝の帝師となったチベット仏教の化身ラマたちは、中国の地域の神々を調伏し、自らの守護神として崇拝するようになった。その１つに中国の道教から伝来したと言われる［看 2014、旦 2016]、文昌神が挙げられる(写真 1、2)。

【写真 1、2 文昌神及びアニェユラの神像とタンカ】

当該地の人々は中国の道教からチベット・アムド地域に伝来した文昌神を「アニェユラ（a myes yul lha)」と呼び、重要な信仰対象として扱ってきた。アニェユラという語は、「アニェ」と「ユラ」に別れる。「アニェ」は「父系祖先」、「ユラ」は「地方神」を意味する言葉である。アニェユラを信仰するチベット・アムド地域では、生まれた子供に「ユラタル」(yul lha thar)や「ブンチャンツォ」(文昌措)、「ブンチャンギャル」(文昌加）など、アニェユラや文昌神の名の一部をとって命名することが多くある。特に本調査地中国青海省海南チベット族自治州貴南県とその周辺のチベット仏教とボン教の両宗派に属する人々は、この外来神（文昌神）アニェユラを宗教混交的な信仰対象として祭礼し崇拝してきた。

チベット・アムド地域には、このような多民族が雑居し、仏教、ボン教、道教などの混淆的宗教実践がみられる。本発表では、チベット・アムド地域の特に半農半牧の生業を営むチベット族の村社会におけるアニェユラ信仰を取り上げ、チベット化された外来神アニェユラという神格の意味と位置付けを考察する。

【参考文献】

看本加
2014 『安多藏区的文昌神信仰研究』民族出版社。(アムド地域における文昌神の信仰研究)

シンジルト
2003 『民族の語りの文法：中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社。

旦正加
2016 *Kri ka' i a myes yul lha' i bod lugs dad mos zhib ' jug.* Krong go' i bod rig pa dpe skrun khang.(チベット化された文昌帝君の信仰研究)

チョルテンジャブ
2018『中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究―同仁県ワォッコル村を事例として』平成 29 年度学位論文、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻。

キーワード：チベット・アムド、民間信仰、文昌神（アニェユラ）、チベット農牧社会